

# マネージメント情報

2011 年 1 月



*Total Herd Management Service*

この記事は、機関誌や日常の出来事の中からわれわれが注目した話題を皆様に提供するものです。  
ご質問、ご要望などなんでもお寄せくだされば、今後テーマとして取り上げたいと思います。

## 1. マイコプラズマ性乳房炎の猛威

### —PCR装置の導入決定—

マイコプラズマ性乳房炎が酪農界の新たな脅威になっています。特にここ数年は十勝や釧路地区あるいは宗谷の大規模農場でマイコプラズマ性乳房炎の被害が目立っているようです。酪農スピードニュースでは、この中には搾乳牛の半数を失い、その被害が1農場で1億円以上というメガファームもあると報道されました。昨年も西春別などで発生し、今も終息していないとのこと。このマネージメント情報でも何回か紹介してきました（マネージメント情報 2010 年 3 月、1 月、2009 年 12 月）が、当社としても、そうした被害から農場を守るために、マイコプラズマの嫌気（CO<sub>2</sub>）培養を昨年より導入しています。（写真1）幸いにまだそれによって発見された症例はありませんが今後とも気を抜けない病気の一つです。

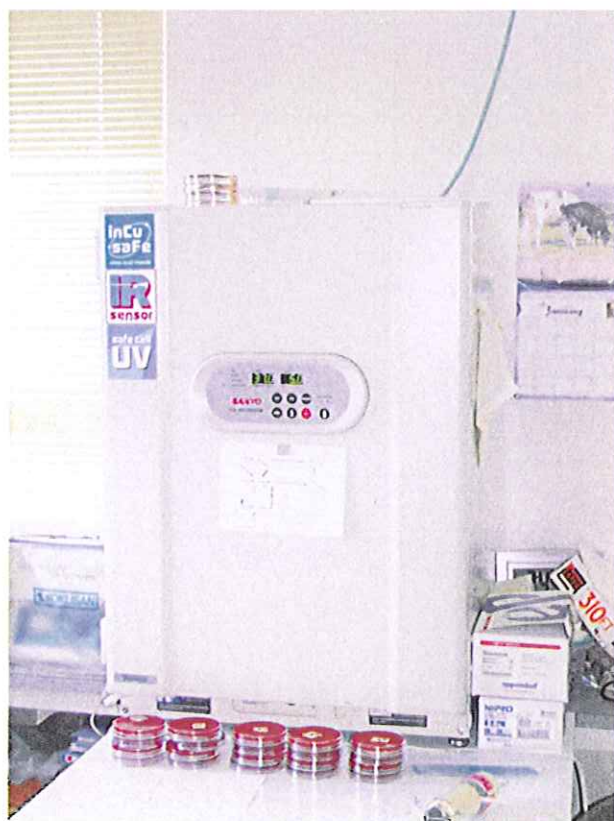


写真1：CO<sub>2</sub>濃度がデジタル表示

ただ、現在の培養による検査は時間のかかることが欠点としてあります。そこで、より迅速で正確な診断がPCR（Polymerase Chain Reaction）法とよばれるもので、細菌やウイルスなどの持つ特定の遺伝子（DNA）断片を短時間に増幅させて診断する方法

です。酪農大学の樋口先生らのグループが開発したスクリーニングキットが発売になり、このPCR装置と電気泳動装置があれば、簡単にそして迅速に診断することができるようになりました。そこで当社としても、このPCR装置を導入することにいたしました。現在、酪農大学の樋口先生の協力を得て稼働させる準備に入っています。おそらく4月頃から稼働できるものと思いますので、自分の農場を守るためにも少なくともバルク乳のスクリーニングテストをすべての農場が定期的に行うことを強く勧めます。現在でも、前述した従来の嫌気培養法によって少し時間がかかりますが、行っています。精度に問題はありませので、今からでも積極的に行ってもらいたいと思います。バルク乳を獣医師に渡してくれるだけですので、酪農家の手間はかかりません。最寄りの獣医師に相談ください。

黒 崎

## 2. 新生仔牛のドライ・ウォームアップハッチ

K農場で、このたび新生仔牛を乾燥させ温めるハッチを作りました。(写真2.3) 既存のハッチにウレタンマットを敷き、電気加熱器を上部に取り付け、出入口が外気から遮断できるものです。この装置は北米の寒冷地の農場で時折みられるものです。まだ、稼働したばかりではっきりしたことは言えませんが、仔牛の健康にはかなり有効ではないかと思います。特にこの冬のような厳寒期にまず仔牛を乾燥させ体温の安定化を図れる意味は大きいとおもいます。皆さんの農場にもいかがですか？



写真2.3：新生仔牛の乾燥・ウォームアップ専用ハッチ

## 3. 韓国の口蹄疫・・猖獗を極める

昨年宮崎での口蹄疫は最終的に29万頭の殺処分によってようやく終結を見ました。その悲惨さはいまだ記憶に新しいところです。しかし、韓国では、それをはるかに超える状態になっています。1月17日現在ですでに殺処分対象家畜は200万頭に迫る勢いです。宮崎の10倍になるのも時間の問題のようです。これを受けて韓国ではワクチン対象地域を全国に拡大した模様です。これは韓国が当分の間、口蹄疫清浄国とはなれないことを意味するものと思われます。この極寒のなかで、畜舎や車の消毒作業が思う

ように効果が上がっていなかったり、安楽死させる薬が底をついてしまい、緊急的に中国から輸入した薬の効きが悪く手間取っていること、さらには対応する人員の不足や疲労など様々な要因が重なり合っているようです。その猛威がどんどんと南下していることも日本にとっては、大きな脅威です。

今から寒冷期にも有効な消毒薬（不凍液などによって効果がそこなわれないもの・・・おそらく塩素系はだめ）などの目途（品目や量）をつける必要があるように思います。

また、以前にも警告したように口蹄疫が地域内で発生した場合の対策は、非常によく整備されてきたように思いますが、よその地域（例えば、十勝や釧路）で発生したときに根室支庁としてどのような対策を打つのか、それらの地域と連携して何をするのかが全く協議されていないのが気がかりです。今から近隣支庁との協議をしておくことが重要と考えます。

（この正月にも北海道のある地域で、口蹄疫の疑いで検査があったようで、幸い陰性だったのですが肝が冷える話です）

黒 崎

この4月から採用予定の帯広畜産大学の住谷君と東京農工大学の奥君の二人から年賀状が届きました。二人とも同じことが書いてありました。それは、「この春からトータルハードマネージメントサービスの一員として仕事ができるよう、現在、国家試験に向け猛勉強している」とのことです。二人が見事合格してこの地に来る日が楽しみです。

## マネージメント情報

### ※三愛精神と健土健民

新しい年を迎えるにあたって私なりの今年のキーワードを考えてみました。

TPP、飼料・原油価格や資材等の値上げや高止まり、少子高齢化・人口の減少、昨年は乳価の低下がありマイナスばかりがクローズアップされている酪農ですが他の農業や他産業に比べるとまだまだ恵まれている現実があります。

昨年お客さんとした時の話を紹介します。

酪農の基本についてでした。

酪農学園大学の設立者、黒澤酉蔵翁の教えである「三愛主義」に基づく「健土健民」の精神が今の(昔も)酪農にとって一番必要な事ではないかという内容でした。

酪農学園大学酪農学部の HP に図式でこの考え方を説明しています。

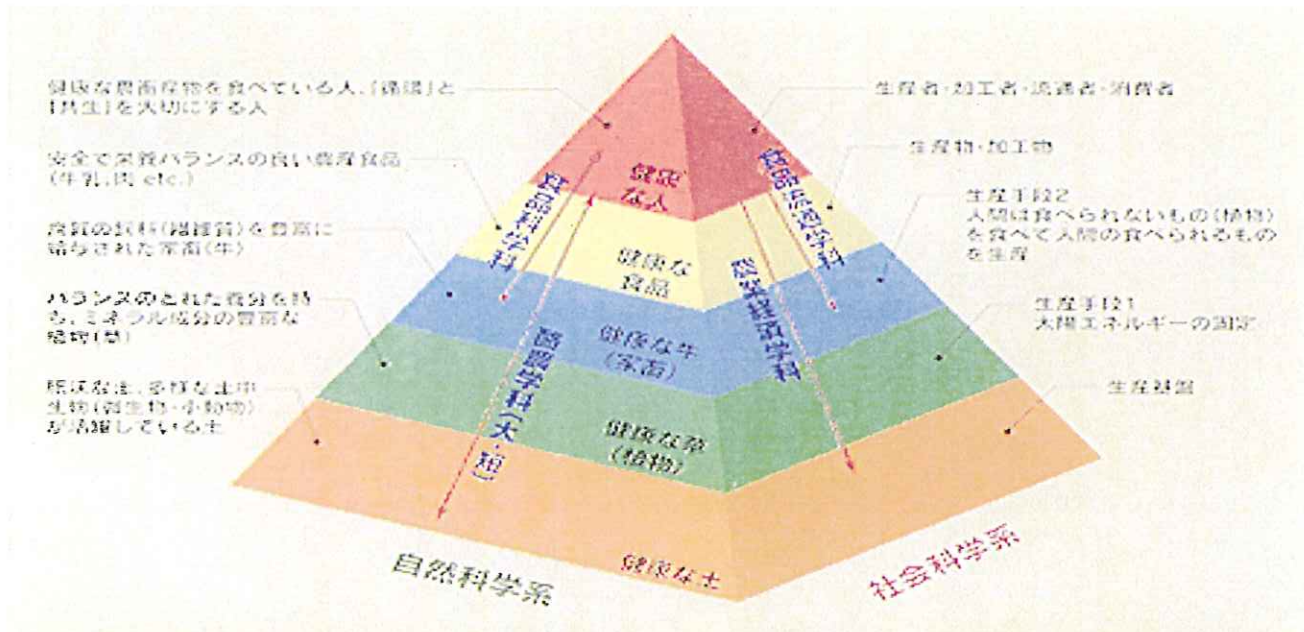


図1. 「健土健民」の考え方と酪農学部・各学科の位置付け

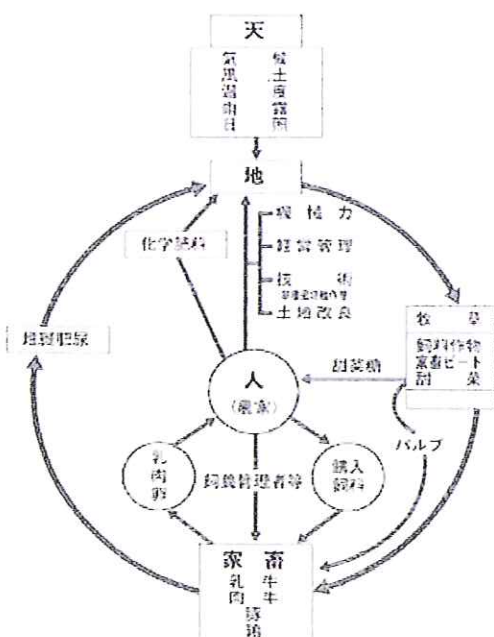


図2. 黒澤西藏の循環農法図

本学の教育の理念は、「三愛主義」に基づく「健土健民」であり、酪農学部も当然ながら、同じ教育の理念を持つ。

図1は、「健土健民」を「土—草—牛—食—人」から構成されるピラミッドで表したものであり、「自然—植物（作物・飼料）—動物（家畜）—食料—人」による構成と考えることができる。人は、ピラミッドの頂点に位置しているが、これは、人が一番偉い存在であることを意味しているわけではなく、人は自然—植物—動物に支えられている存在であることを意味している。酪農学部の4学科は、この図の中に位置している。

そして、この「健土健民」という理念は、図2に示した「循環農法」によって実現される。酪農学部各学科・各研究室は、獣医学

部とともに、この循環農法図の中のいずれかの部分を担当しているわけである。循環農法図の各部分を担当する多くの研究室・教員が協力して、現場で使える考え方と技術を作り出すのが、酪農学部役割である。【酪農学園大学酪農学科 HP より抜粋】

結局「土―草―牛―食―人」の「土―草―牛」のところの話になります。

この部分が北海道、しかも酪農専業地帯根室の最大のアドバンテージでもありウィークポイントでもあるという現実です。

年々いろいろな意味で草が荒れ、良質な粗飼料の確保が難しくなっているということです。このような状況の草を基礎飼料にいくら穀類を給与しても思ったように牛乳は生産されませんし健康に牛を飼う事はできません。

時間がかかってもお金がかかっても「土づくり」→「草づくり」→「牛づくり」を原点に返って始める時ではないでしょうか？

牛が健康である限り彼らはわれわれを裏切らずに助けてくれるはずです。現状は私たちが彼女たちを裏切っているのかもしれない。

黒澤西蔵翁と三愛精神と健土健民について検索してみました。

①「三愛精神(神を愛し、人を愛し、土を愛す)」は、宇宙の摂理を探究し、理解に務めること、隣人の存在を認め、これを理解すること、そして人類存続の礎である大地の役割を理解し、その存在を尊ぶこと、を教えています。

②酪農は資源循環型農業の最たるものである

③健やかな土地には健やかな民族がある

④大地の牧草にはぐくまれた乳牛は、健やかな牛乳をはぐくみ、人々の心とからだをはぐくみます。(雪印乳業HP)

⑤「酪農の父」宇都宮仙太郎翁が黒澤西蔵翁に言ったという

「牛飼いは三つの“徳”がある。役人に頭を下げなくてもよい。牛には嘘をつかなくてもよい。そのうえ、牛乳は人を健康にする」。

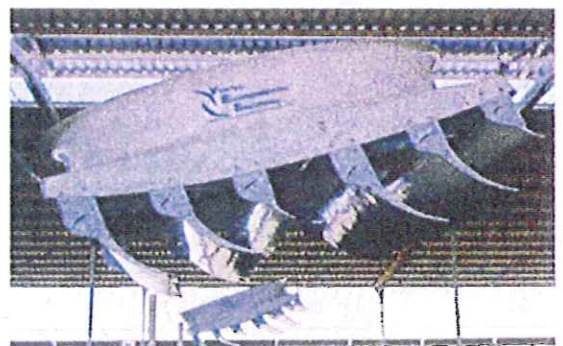
⑥黒澤西蔵翁の晩年は「酪農こそ農業の最高の形態である」をモットーであると語っていました。

自分次第でまだまだ酪農には未来があるはずです。

※ 鷺山さんからの情報です。

#### サイクローン 72 インチ

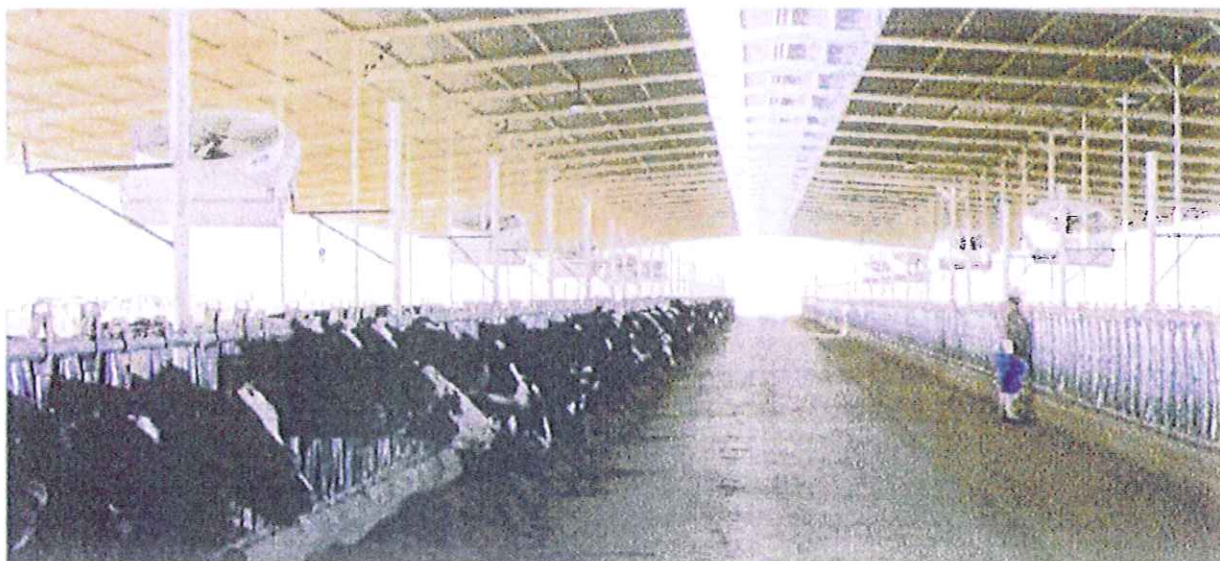
VES 社が誇る最も多目的な水平型送風機です。直径 72 インチ(182.88 cm)のアルミ製の羽根 6 枚は毎分 1,557 m<sup>3</sup>を超える風をわずか 2,200 ワット(高速時)と 300 ワット(低速時)の電力消費量で送り出します。一般的な天井ファンは暖かい空気をゆっくりと上から下に移動しますが、サイクローンは低速で同様の働きをし、高速では風速の速い空気の流れを作り出してクーリングに大きな効果を発揮します。高速運転時にはファン直下で 6.1 m/秒、23 m 地点で 1.5 m/秒の風速を達成します。



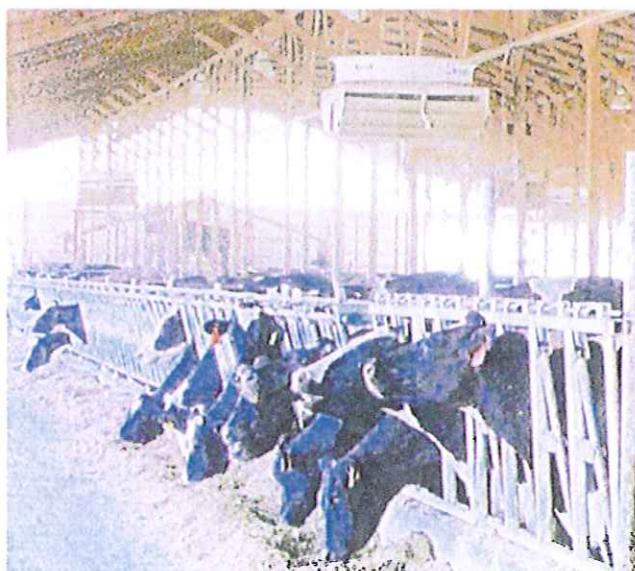
#### 【規格】

- ・ ベルト駆動、高速で 300 RPM、低速で 50 RPM
- ・ 送風距離は 2 方向送風の場合、幅 10.7 m、一方向 30 m ずつ。片側送風も可能 (60 m)。
- ・ 72 インチ (182.88 cm、6 枚羽)。
- ・ 3 馬力、高速で 2.2 KW、低速で 0.3 KW
- ・ 重量は 170 Kg
- ・ オプションで変速駆動とミストが装備可能。

一方向送風で設置された牛舎の写真



二方向送風で設置された写真



直径が72インチ(182.88cm)もあり、ファンとファンの間の風の流れが繋がり設置台数が1/4~1/5に減らすことが可能です。また、左の写真の様に下向き(直下)に設置しても自動的にフラップの角度が変わりこの状況でもファンとファンの間には十分な風速、風量が確保されるということです。ただ、敷料が軽いオガのような場合には飛んでいってしまいそうです。アメリカの敷料は砂が多いのでこのタイプの設置も問題ないのでしょうか。

興味のある方は私までご連絡下さい。

#### ※ TOP セミナーの開催について

最終回第4回目のTOPセミナー(雇用セミナー)は来年1/28(金)10:00-15:00の予定で別海町交流センター「ぷらと」で開催することになりました。

雇用問題でお悩みの方はとても多くいらっしゃいます。一人で悩まずに何かのヒントがあるはずですので、是非参加して下さい。

私は全ての基本は「人とどう関わるか」ということだと思っています。

・西越情報をひとつ。5年次から始まる臨床実習開始前の全国の医大80校一斉に行われるCBTという統一試験が年明け早々にあり、旭川医大で4年生101人中7番ということとで相変わらず彼なりに頑張っているようです。本人曰く、「もう少し上のつもりだった」とのことでした。早いもので、残り2年ちょっとです。

・四月からは新生THMS!のはず!? あらためて本年もよろしくお願いいたします。

23.1.21. Y



昨年202万部売れたという、超ベストセラー小説「もしドラ」は、その本の長い題名:「もしも高校野球の女子マネージャーがドラッカーのマネジメントを読んだら」の略です。左のようなアニメが表紙になっているので、逆に買い難い感じもしますし、大衆迎合感も手伝って、なかなか手が出なかったのですが、年末に思い切って買ってみました。そしたら結構面白かったのです。

「もしドラ」の内容は、ひょんなことから野球部のマネージャーをやることになった女子高生がドラッカー著の「マネジメント」を、題名だけで中身を見ずに野球部のマネージャーの仕事の参考書として、購入してしまったという誤解からスタートします。「マネジメント」の著者 PF ドラッカーは、経営学・社会学の父とも呼ばれる偉人です(不肖私はもちろん存じ上げておりませんでした…。)。そして、「マネジメント」の内容を、部の改革に取り入れたら、意外に上手くいったというお話です。ですから、見方によれば青春チャレンジものですし、見方を代えれば経営学入門書とも読めます。したがって、この本を応用して、『もしも酪農家の後継者が読んだら』とか、『もしも獣医師が読んだら』に置き換えると、さらに興味が湧いてきます。

特に興味深かったのは、『高校野球の顧客とは誰か』という問いに対して:野球をやるためにお金を出してくれたり、協力してくれたりする人たちと考えると、親、先生、学校、東京都、都民、高野連、全国の高校野球ファン、マスコミ、スポンサーなどの関係者が顧客となり、また野球部員自体が野球部の従業員でもあり一番の顧客でもあるということになるのです。そして、野球部を『顧客に感動を与える組織』と定義し、『甲子園に出ること』を目標とするのです。さらに、企業の目的である『顧客の創造:マーケティングとイノベーションを行う』ことを野球部で実践しようとしています。そして、野球部全員の意識の把握や戦術の改革を行い、他の運動部との練習や、少年野球チームへのボランティア交流などを通じて『甲子園に行く』意識を高めます。結果、物語としてはそれが実現するのですが…

これらの、いわゆる「企業の基本」を酪農家個々の「会社」に当てはめてみたら:

『もしドラ』の主人公『みなみちゃん』の場合、まず目標を『甲子園に出ること』としました。これは、誰もが納得する目標であり、高校野球の顧客全員の利益に繋がる目標です。

私は、当地の全ての酪農家の目標は『わが国の食を支えること』にしてはどうかと提案したいと思います。この目標は、間違いなくどんな酪農家にも当てはまる目標です。公共性(=社会貢献度)があると同時に、他の酪農家や、他業種と共存できる目標であり、かつ全ての顧客の利益に繋がる目標です。ですから、誰もが納得できる目標です。

一方で、他の農場の事は切り離して、とりあえずその農場の繁栄を第一義的に目標とされる方を多くお見受けします(大学時代や、セミナーなどで)。例えば、『何頭搾りたい』とか『何t搾りたい』とか『放牧/フリーストール/繋ぎでやりたい』などという目標です。しかし、この種の目標では社会貢献度や顧客への利益が2の次になってしまっています。それに、この種の目標は経営の目標ではなく、経営手法です。

仮に、単年度の目標が収支の黒字であり、中長期の目標がその積み重ねであったとしたら、その目標は酪農業に限らない『前提』です。また、将来は経営を大きく発展させようと考えていても、時代背景や、自分側のありようでは経営手法を変えざるをえない事態が起こりえます。ですから、経営手法は目標に据えるべきではないと言えます。

『わが国の食を支える』という目標は、農場従業員さんや実習生などに、農場作業の意味や大切さを伝える強いメッセージになるはずで、さらに、個々の農場がこの目標をかけ、多くの農場が共鳴すれば、『わが国の食を支える』という目標は、酪農基地である当地においては町ぐるみ、地域ぐるみの目標ともなりえます。なりえると言うよりすべきだと思います。そうなれば一般消費者さんたちの理解も得易くなると思うのです。